

フランス留学記ー古賀敦子

まず始めに

音楽を勉強する方で、一度は本場のヨーロッパに留学してみたい、と考える方は多いことでしょう。でも、ツテやコネがないと駄目だと考えられている方もいるかもしれません。今はまた色んな状況が違うとは思いますが、私はつてもコネもないところから、様々な方々の助けを得て留学しましたので、この留学記が何かの参考になれば、と思い、思い出すままの状況を書いてみました。

高校時代

私は福岡出身ですが、高校から桐朋学園音楽科に上京しました。桐朋学園に通い始めた頃から、しばしばパリ国立高等音楽院の話聞くようになりました。丁度、そこで勉強中の方々が国際コンクールで上位入賞が続いたり、桐朋学園とパリ音楽院出身の工藤重典氏が、桐朋で来日マスタークラスを開かれ、そこで工藤氏の演奏もお話も聞いた事で、今度はだんだんパリ国立高等音楽院に憧れを持つようになりました。

でも、どうやって渡仏するのか、どうやってフランスで受験するのか、どうやって受験申し込みするのか、勝手は全然わかりません。

留学を夢見て、実現へ。

留学に関心を持ち始めた私を、私の副科ピアノの先生だった田中麗子先生がおおいに励ましてくださいました。

田中麗子先生は御自分もヨーロッパで活躍して日本に帰ってきたばかりで、自分の留学の話も聞かせてくださり、

“あなたの音楽性はヨーロッパ向きと思う。”と、色んな留学の参考書を用意していただいたばかりではなく、初めて挑戦したコンクールにも、一次も二次も付き添っていただいたのです。

そして、惜しくも本選に残れなかった時、

“やはり、日本内のコンクールより、外に出て、国際コンクールに出たほうが良い。あなたがやろうとしてる音楽は、日本では認められないでしょう。

でも、きっとヨーロッパだったら違うわよ。“とまた大きく励ましていただきました。田中先生は他にも留学したい生徒に様々なアドバイスをなさっていました。

“まずは、私は留学する！と決めて、宣言する事よ。決意が固まったら、周りもその決意に動かされて、だんだん事情がそうになっていくわよ。”
と言うような言葉を戴いたのを覚えています。

10代の音楽学生には、まだまだ師事する先生との相性が重要ですが、この頃の私は闇雲にパリ音楽院に憧れ、師事する先生の事は考えていませんでした。桐朋で師事していた野口竜先生からは、そのことの危なさを指摘されました。調べてみたところ、パリ音楽院には2つしかフルートのクラスがなく、先生は2人。これは、両方の先生の夏期講習に行き、相性を確かめてみようと、高校2年の夏、その一人の講習会に、フランスに行ってみました。

高校3年になった時には、留学の決意は随分固まり、留学どころか、高校卒業したら、後の生涯をフランスで過ごす、ぐらいの気持ちになっていました。本場の音楽に触れたいという気持ちの他に、一つは、高校生活を送る中で、“自分は日本に合っていないんじゃないか？日本人との相性も悪いのではないか？”というような、ぼんやりとした疑問が出てきてるのもありました。音楽性がヨーロッパ向き、という事だけでなく、人間性もそうなのでは？と。普段忘れてますが、私は幼稚園児の頃、カナダに住んでいた事もあったので、何か影響されていたかも知れません。

この頃に、“留学したいなら良い相談に乗ってくださいよ”と、西田直孝先生を紹介していただきました。西田先生に短期間で教えていただいた事、アドバイス戴いた事が、留学してまもなく大きな助けになりました。

田中麗子先生が言われたように、決意が固まると事が動くものです。桐朋の峰岸先生が、“僕の弟子が今デボストに師事して、パリ音楽院にいる。受験申し込みの方法など手紙で訊いては？”と、そのお弟子さんの住所を教えてくださいました。そうしてやっと、受験要項を申し込むところまでこぎつけました！

そうしてパリ音楽院から送られてきた受験要項には、ご丁寧にも“フルートは何百人と受けて、外国人は受かる人が一人か二人だ。あきらめた方がいいのではないか”という手紙が入っていました。

受験要項はすべてフランス語で（当たり前ですが）お手上げでした。どうも、締め切りはまじかのよう。パニックして辞書とにらめっこしていたら、母が電話をくれ、“フランス語教育振興協会というところが東京にはあるようだ。そこにお金を払って受験申し込み代行してもらえるか、きいてみたら”とアドバイスしてくれました。

結局フランス語教育振興協会がすべて代行してくれ、書類が出来上がったのは当日証印有効の締め切りの、その日でした。なんてギリギリに運がいいんでしょう、、、。

留学

高校を卒業した夏に、いよいよヨーロッパに発ちました。まずは直接、その時デボスト氏が講習会をやっていたイタリアのアッシジに行きました。デボスト氏に対しては、事前に峰岸先生が紹介状を書いてくださり、その手紙と一緒に、私は2曲ほど自分の演奏の録音も同封して、“あなたと勉強したい”意思の手紙も送りました。講習会が始まると同時に、デボスト氏は大きな声で、“古賀敦子さんとはどの人だ？”と。私が前に出ると、“カセット、聴いたよ。良く吹けてる。ありがとう。峰岸氏にも手紙をありがとうと伝えてくれ。”と、カセットを返してくれました。ちゃんと聴いて頂き、講習会で気にかけていただけた事で私は感激でした。

しかも、デボスト氏の演奏は、レコードやCDで聴いたのよりもずっとスケールが大きく、何とも言えない心地の良い音で、音楽が自然で、ぐいぐい引き込まれていきました。CDだと、音が細く聴こえるのですが、実際の彼の音は暖かいオーラに包まれるような、凄い包容力のある不思議な音で、決して細くないのです。CDに出来ない良い音があるものだ、と実感しました。

また、この講習会、珍しい事に、フルートでは日本人は一人も参加していなかったのです。片言の英語のみで過ごしましたが、それが外国語でコンタクトを取る良い訓練にもなりました。友達も出来、ちょっとは言葉に自信ができました。

ただ、パリ国立高等音楽院の入試は、審査員が全員院外から選ばれる為、“僕は君に点数を上げたり推薦したりしてはいけないのだ。入試には君自身の力で受かる以外ないよ”とデボスト氏には言われました。公平でいいな～、と思いましたが。

デボスト氏は奥さんのキャティーさんもフルーティストで、レッスンのアシスタントをされていました。デボストのレッスンで消化しきれない分を、キャティーさんが細かくレッスンしてくれる、という、とても良いコンビネーションです。

講習会も終わって、この先数ヶ月、パリで一人で受験の準備をしないといけません。私はキャティー氏に、“受験まで、定期的に個人レッスンしていただけないでしょうか。”と申し込みました。デボスト氏は個人レッスンはやらないことを公にしている、ちょっと尋ねにくかったのですが、キャティー氏の存在は救いでした。快諾をいただき、パリでの受験準備が始まりました。

途中、フランス内で工藤重典氏の講習会にも行き、そこでは工藤氏にはレッスンだけでなく、本番に慣れるよう、毎日のように受験曲を演奏会で吹くようにもしていただきました。工藤氏は大らかで優しい方で、レッスンは漫才のように笑いが耐えない愉快な雰囲気の中で、でもしっかり学びました。

受験曲

パリ音楽院の受験曲は、あらかじめ宣言された曲のほかに、数週間前に違う曲も付け加えられました。どのぐらい早く曲を仕上げられるかも審査になるのです。ところが！

キャティー氏の、この新しい曲の最初のレッスンに、私は間違った曲を練習して持って行ってしまったのです。手書きのフランス語を勘違いして理解したのです。キャティー氏はあわてず、落ち着いた態度で、“あわてなくていい。今すぐ正しい曲の練習の仕方をレッスンしましょう。あなたが練習してきた曲のほうが難しいから、こんな曲はなんでもないわよ。”

と励まして、正しい曲をすぐレッスンしてくださいました。

デボスト氏にも、曲の仕上げを時々みていただきました。
英語は嫌いなフランス人が多い中、キャティー氏はアメリカ人で、
デボスト氏もフランス語英語ともバイリンガルで、この事も私にはラッキーでした。
高校時代、フランス語を第二外国語として取ってましたが、実践には無理でした。
英語は、父が中学時代、教科書を丸暗記させる訓練を厳しくしてくれた事で、
なんとか片言なら話せたのです。
この訓練は現在ドイツ語を話す事にも基本となって助けになっています。

受験

夏からパリで準備を始めて、受験の一次が10月頃だったと思います。
確か、パガニーニのカプリスト、イベールの協奏曲でした。
本番までもピアニストとの合わせに間違った住所に行ってしまうと、待たせた
ピアニストを怒らせてしまったり、色々へまをやらかしました。
本番吹き終わった後、キャティー氏に電話して、
“イベールは大変気持ちよく楽しんで吹けたのだが、パガニーニは
音が曇って楽しめない演奏になった。”と報告しました。
綺麗な方でしたが、性格はどっしり落ち着いたキャティー氏に、
私はすっかり精神的に頼っていました。

一次通過

一次の結果が先だったか、二次の課題曲の発表が先だったか忘れましたが、
一次は無事通過して、すぐ二次の準備になりました。
やはり、最初、手書きの発表、自分の名前を見落としてあせりました。
よく見たら“なんだ、、、あったよ、、、よかった～！！”

これがパリのエスプリか～

この頃、私はシャワーもトイレもついてない屋根裏部屋に住み、
電話もなく、友達もほとんどなく、生活で頼れる人もいなかったのですが、
不思議と孤独感も不便な思いもありませんでした。
むしろ、パリの街の魅力に感動していました。
パリの空はいつ見てもなんとも綺麗な微妙な色あいをしていて、
その色が日によっても時間によっても刻々と変わっていきます。
そして、それがパリの街並みとしっくりマッチしています。
また、セーヌ河ほとりには、写真ではわからない、
特別な空気があるようでした。

“これをエスプリって呼んでるのかな”

多くの画家がフランスに住む理由がよくわかる気がしました。

音を出していい夜の十時まで練習し、十時過ぎに魅力的な街を
ほっつき歩く毎日でした。今思えば怖いもの知らずで、
決して安全な街じゃないのによく何もなかったな、と思います。

観光ヴィザは3ヶ月しか有効じゃありませんでしたが、飛行機でフランスの外にいったん出れば、また3ヶ月大丈夫、と聞き、飛行機でスイスの岩花氏を訪ね、色々アドヴァイスいただいて、またすぐ飛行機で戻る、という事もありました。

あわてもの

二次本番が私の苦手な朝とわかり、ある時から時計を2時間進めて暮らしました。朝方にしよう、と努めたのです。本番の日、ついつい朝ごはんを食べ過ぎて、“これじゃ苦しくて吹けない！”と、あわてて散歩しまくりました。本番もお腹が苦しい感覚のままだったように思います。

本番後、キャティー氏に、出来が不満足だった事を告げると、“そんな事言ってる場合じゃない。いついつの何時にどこどこで、”私は英語がよく解ってなくて、キャティー氏の言うその日が**結果発表**と思い込みました。それまで結果を待て、という事だと思い込んでました。もう、試験そのものは終わった、と。

キャティー氏が言った、その日のその時間に音楽院で結果の表を探してると、なぜか受験者が皆、フルートを持って、うろうろしてるのです。“なんでみんな結果発表にフルート持ってるの??もしかして、まだ何か吹かなきゃいけないんだ!!!”あたり!!まだその日に初見の試験があったのです。

あわてて家に走って帰り、着替える暇もなく、洗ったばかりのびしょびしょの髪と汗まみれの姿のまま、フルート持ってまた音楽院に走りました。

なんとか自分の番に間に合っていました。あ～恐ろしい、、、。

わりとすぐ、名前を呼ばれ、何気ない顔を作って舞台に上がって行きました。初見は全く慣れてません。楽譜を見て、“わ～、複雑なリズム、、、”と思い、なるべくゆっくり、吹けるテンポで吹きました。ゆっくりのテンポをごまかす為に、音楽的に凄く歌いたいんだ、、というオーバー気味の感情表現をしました。事前にあわてまくって走りまくったお陰か、度肝が座っていたように思います。デボスト氏が、審査員としてではなく、観客として聴いていました。

本当の結果発表

あった～～～!!!最終結果の発表は、外国人は受かった人が3人だけだった為、見間違える事はありませんでした。私は2番目でした。この、2番目、というのがまた運命の分かれ目でした。この年、デボストクラスの席の空きが2席、その受かった3人ともがデボストクラス希望者だったので、私はぎりぎりセーフでデボストクラスに入れたのです。

ヴィザ

これから音楽院で勉強するにあたり、問題は滞在ヴィザへの獲得です。音楽院から入学証明書を出してもらって、それを持っていったん日本に帰りました。音楽院はわりとすぐにスタートしてしまうので、なんとか最短の時間でとれる方法を母が探し出してくれ、大阪で数日で取れ、ほとんどトンボ帰りでヴィザを取りました。

アップアップの一年目

パリ音楽院のレッスンが始まってからは、自分を溺れかけてる魚のように感じました。今まで数ヶ月かけて一曲仕上げていたペースが、この音楽院では一週間で一曲！しかも、練習曲もオーケストラスタディも仕上げなきゃいけないくて、フルートのレッスンの他にもソルフェージュでも山ほど宿題が出ます。一日中練習しても、レッスンではなんとか吹ける程度で、しかも、クラスのみみんなも聴いているのです。

そして、大きな課題が、、、。

“君の魂は音楽的で、君の心で鳴ってる音楽はとてもいい。だけど、それと君のテクニックは全然結びついてない。君のテクニックは音楽的でない。フルートの構えから、テクニックは全部やり直さなくていけない。”

これは、本当にそうだな、と思いました。ずっと、自分のやりたい事と楽器を操る事が一致してない感覚があったからです。これは、フルートだけでなく、日本の音楽教育自体がヨーロッパとは違い、テクニックと音楽を別々に教え込むやり方のせいもあるでしょう。いずれにしろ、一からやり直し、、、。しかも、毎回練習し切れてない曲をデボストのみでなく、皆に聴かれてしまう。この一年間はいつも頭がくらくらしてるようでした。

しかし、その中で、時々デボストが聴かせてくれるお手本は、一生忘れられないほど美しい演奏でした。“デボストは、いわゆるフランス伝統の美しい音を持つ、最後の一人だ”と、よく言われていました。この、何ともいえない、鮮やかで軽やかで霧のような音を聴くと、どうやってもマネもできなく、他の誰にも出せない音だ、、、と、その言葉がよく理解できました。

クラスのレベルはとても高く、中には、後に有名になったエマニュエル・パューも居ました。“この人、やたら上手いなあ。いい音だなあ。”と当時から思いました。デボストの芸術性だけでなく、レベルの高い中で揉まれる、という事も大きな刺激でした。

あっぷあっぷしてるうち、結構あつという間に再び夏が来ようとしていました。その時、ショッキングなニュースが入ってきました。
“デボスト、今年で音楽院辞めるんだって！アメリカに行くんだって！”

ショック！

先週キャティー氏が、“来年からは私のレッスンも一人一週間に一時間に増やす”（それまでは音楽院での彼女のレッスンは一人二週間に30分だった）と話してて、それは嬉しい！と思ったところだったのに、デボスト氏は急にアメリカ行きを決意したようでした。

“ああ、私はこの一年で、一体彼からちゃんと学べたんだろうか、。。”
巨匠のそばにいながら、光がまぶしくて目が開けていられない状態だった、、と
思いました。
デボスト氏程の芸術家に後釜に来ていただけないだろう、と言う気がしました。
ここで、工藤重典氏が、とても良い事を言ってくださいました。
“先生がいない状態って、とても良い先生なんだよ”

2年目

デボストが居なくなった2年目、どちらにしろ1年目に課題が多すぎて消化不良を起こしてる状態でしたから、
“この一年、しっかりデボストの言った事を思い出して、ゆっくりあせらず基本をしっかりさせよう！”と決意しました。
後にいらした先生も、思ったよりも優しい、それぞれのペースにあわせてくださる良い先生でしたが、専門は現代曲で、私はまだ現代曲の前に古典をしっかりやりたいと思っていました。

ミッシェル・モラゲス氏

室内楽でも、フランス人の、とても優秀な頭の良いハーブの女の子と組めていて、その子と合わせる事でも勉強になっていました。
丁度2年目の時に、室内楽のアシスタントとして赴任してきた
ミッシェル・モラゲス氏というフルーティスト、言われる事もしっかりしていて、注意される事も厳しく、またごく納得いくもので、ハーブのマリアンヌとも
“いい先生がアシスタントになったね！”と喜びました。
私は、この先生にならモーツァルトやバッハなどの古典もしっかり学べるのではな
いか、と思い、個人レッスンも申し込んでみました。
モラゲス氏に個人で付いたのは大正解でした。
どんな曲でも、その曲の構成、スタイル、アイディア、本当に多くの事が学べまし
た。しかも、フランスでは、個人で誰に付こうが、音楽院の先生が気を悪くする、
という事ありませんでした。
フランス人はあまり他人に興味がなく、とても個人主義な民族のようでした。
モラゲス氏にはフランスを去ってドイツに移るまでずっとお世話になりました。

努力が少しずつ開花

3年目になる頃から、少しずつ自信もついて、努力が実る実感が持て始めました。また、音楽院内からも、ノルウェーへの演奏旅行に、他の優秀な学生達と共に送り出していただいたり、何かと院内のコンサートに出場させていただいたりして、いつの間にかアップアップしていた状態から、演奏を楽しめる状態に落ち着いていました。

この頃から、音楽院以外でも、マリアンヌと演奏会に出場したり、ピアノの小倉幸子さんと、ディジョンでデビューさせていただいたり、演奏会にも恵まれてきました。国際コンクールでも結果が出始め、フランス語にも慣れ、一番伸び時だったのが3年目でした。その勢いでパリ音楽院の重要なイベント、卒業試験もひたすら楽しく演奏する事で、それまでの自分には考えられなかった結果が出ました。クラスで溺れてた私が、卒業する時はトップに！

この頃、演奏していると、自分が演奏してるのではなく、音が天から降ってきてくれるような、不思議な体験を何度もしました。その状態になると、やはり聴いてる側も深く感銘を受けているのです。人生の中でも一番自信のついた時期でした。そのままの勢いで、さらい難関と言われたトロワジエム・シークルに合格。ここではオーケストラと共演させていただいたり、定期的に演奏旅行があったり、自分がもう演奏活動できてるかのような錯覚がありました。しかし、すべては“学生として”の話ですからね、。

トロワジエム・シークル

自信がついたはずの大学院合格後、割とすぐ、長期のスランプに陥りました。ちょっと、不思議な体験から、基本を忘れてそればかり求めすぎたかも知れません。コンクールも一次で落ちたり、あまり結果も出せない時期でした。スランプを本当に脱出するのに一年かかりました。

スランプを脱出して、ようやくなんとか国際コンクールなどで芽が出るようになってきました。演奏会も定期的にあるし、（お金にはほとんどなってませんが）このままパリに居れば、なんとかやっていけるのかな～と思い始めました。しかし、卒業試験の頃に感じたような、“伸びてる”感覚はなく、なんだか自分が伸び悩んでる気がしていました。調子が悪いわけではなかったのですが、。

ドイツに引越し決意

留学して5年がたち、すでにトロワジエム・シークルも終わり、ヴィザの為に同音楽院で音響学のクラスに入っていました。

ドイツ物をドイツで勉強してみたい、と、パリから通える距離のケルン音楽大学に週一回通っていました。ケルンでの師のアドリアン氏からは、

“本当にドイツ物をドイツのスタイルで出来るには、ドイツ語もできなくちゃ。君がフランス物を吹くと、あ、フランス語をわかっているな、と感じるけど、ドイツ物は、ドイツ語知らないな、と感じるよ。”との言葉。

時々レッスンを聴講していたチェロの教授、クラウス・ハイツ氏からも、“せっかくドイツに通っても、レッスンだけじゃ、本当のドイツ音楽が体に入ってこないよ。ちゃんと住んで、人とも交流がなくちゃ。”と言われてましたが、また新しい言葉をやる勇気もなかったのです。それに、パリという魅力的な街から見て、ドイツはやたら野暮ったく見えました。何より、今せっかくあるコンサート活動がなくなってしまう、、、。

この時に、尊敬して、時々レッスンを受けていた巨匠、オーレル・ニコレ氏に、“敦子、パリを出なさい。君はもう、5年以上パリに居るだろう？
芸術家は動かないと伸び悩むんだ。”と言われてました。

神の声のように感じました。そのとおりだと思いました。

ドイツに引越し前の挑戦

ニコレの言葉で、すでに勉強しているドイツに引っ越す決意が出来ました。荷物は少ないので、引越し準備はそんなに大変ではありませんでした。ただ、パリに未練はありました。駄目もとで、あるパリのオーケストラの入団試験も受ける事にしました。もし受ければ、ドイツに引っ越す理由はなくなります。伸び悩みも、仕事を始めたら変わるかもしれません。

しかし、入団試験は、マリアンヌとの2週間のモロッコ演奏旅行から帰った次の日になりました。モロッコではそんなに練習出来ないでしょうから、難しいところです。“運命かな、、”と思いましたが、一応、やってみました。

入団試験は意外にも、一次、二次通過して最終審査に残り、ふと演奏旅行の疲れが出そうになるところ、最後まで集中するよう努めました。
最終審査、

“よし、これで全曲吹いた！”と、安心したとたん、審査員に
“もう一曲、これも吹いてください”と新たに曲をわたされました。
もう、私の力は切れていました。
グシャグシャグシャ、、、見事に失敗して、せっかくのチャンスが水の泡に。
これでドイツ行きが決定しました。

これも運命の分かれ目だったかもしれません。
私は今、ドイツほど自分に合った国は他にないだろう、と思ってるので、この時パリのオーケストラに受かって、フランスにずっと残っていても、今より幸せだったかどうか、、、。

なが〜い留学記になってしまいました！最後まで読んでいただいた方、感謝します！！

古賀敦子